HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マニアの社交場「BAP cafe」：“狭く深いサイエンスカフェ”の魅力
Author(s)	菊池, 結貴子; 江崎, 和音; 中島, 悠 他
Citation	科学技術コミュニケーション, 20, 3-13
Issue Date	2017-01
DOI	https://doi.org/10.14943/76291
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64027
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC20_001.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

報告

マニアの社交場「BAP cafe」
～“狭く深いサイエンスカフェ”の魅力～

菊池 結貴子[1]，江崎 和音[2]，中島 悠[3]，石川 遼子[4]，伊與木 健太[5]，
正田 亜八香[4]，音野 瑛俊[6]

BAP cafe: Meeting Place for Enthusiasts

KIKUCHI Yukiko[1], EZAKI Kazune[2], NAKAJIMA Yu[3], ISHIKAWA Ryohko[4],
IYOKI Kenta[5], SHODA Ayaka[4], OTONO Hidetoshi[6]

要旨

近年，科学者と非科学者がテーブルを囲んで気軽に語り合う「サイエンスカフェ」が日本で広がりつつあり，開催回数・開催場所ともに急激に増加している．それに伴って，サイエンスカフェの形式も多様化してきており，現在では実に様々な形式のサイエンスカフェが開催・報告されている．本稿では，こうしたサイエンスカフェの多様性の一端として，著者らの運営するイベント「BAP cafe」を取り上げ，その運営方法と実施実績を詳述するとともに，実施記録や参加者へのアンケートをもとに，BAP cafeの特徴と効果および今後の課題について考察を行った．BAP cafeではサイエンスカフェの要素の一つである「わかりやすく説明すること」よりも，「専門的な内容について濃密な議論を展開すること」に重点を置いており，サイエンスカフェの新たな一形式として著者らは位置づけている．スピーカーと参加者の間のみならず，参加者同士，スタッフと参加者の間での対話が自然に起こり，議論が盛り上がる点が特徴であり，参加者からは，スピーカーとの距離が近く，“マニアック”な話題を共に楽しみながら深く議論を交わせるといった評価を得ている．専門性の高い内容はサイエンスカフェでは避けられがちであるが，BAP cafeではそれが長所となり，参加者を獲得して継続的な開催につながっている．

キーワード：サイエンスカフェ，出張授業，双方向コミュニケーション

1. はじめに

20世紀にイギリスおよびフランスで始まり，日本では2004年頃から広まり始めたサイエンスカフェは，コーヒーを片手に肩の力を抜いて科学者と非科学者が科学について語り合うイベントである（Dallas 2006, 227-229）．「気軽に参加できる」「双方向性を重視した」サイエンスコミュニケーションの一つの形として広まり続け，日本でのサイエンスカフェの開催回数は2007年度の時点では年

2016年9月12日受付　2016年11月29日受理
所　属：1. 東京大学大学院農学生命科学研究科
2. 東京大学大学院理学系研究科
3. 東京大学大気海洋研究所
4. 国立天文台
5. 東京大学大学院工学系研究科
6. 九州大学先端素粒子物理研究センター
連絡先：kikuchi@marine.fs.a.u-tokyo.ac.jp

間382回だったが，2013年度には963回にまで増加した．サイエンスカフェが少しずつ発展し，開催回数が増えるとともに，サイエンスカフェの形式も多様化してきている．会場の広さや形態，トークにおけるスライド使用の有無，ファシリテーションの方法等は実に様々である（渡辺 2014, 5-7）．

このような状況の中，著者らは，5年以上にわたって，イベント「BAP cafe」を運営してきた．BAP cafeは研究者と非研究者がコーヒーを飲みながら対話するという点ではサイエンスカフェの一種であるともいえるが，トーク内容に違いがある．一般的にサイエンスカフェは，「難しい科学の話をわかりやすく説明しつつ，来場者と双方向のコミュニケーションを図る場」としてしばしば定義され，スピーカーの研究を伝える際に「わかりやすさ」を犠牲にしてまで内容の詳細に踏み込むことはあまりない.しかし，BAP cafeでは仮に一定程度の「わかりやすさ」や「親しみやすさ」を犠牲にしたとしても「最先端の研究内容を」「心ゆくまで」話すことに重点を置き，“マニアック”な話題であってもスピーカーも来場者も共に楽しみながら濃密な議論を展開しようという趣旨のイベントである（本稿における“マニアック”という言葉の定義については2.2で詳述する）．

上述した通り，BAP cafeは長きにわたって開催されてきており，その開催回数は60回を越えた．本稿では，BAP cafeを新たなサイエンスカフェの一形式として位置づけ，これまでの実施内容と成果を詳述するとともに，BAP cafeの特徴と今後の課題について考察を行った．

2. 背景

2.1 BAP cafe開催の経緯

BAP cafeを主催しているのは，「大学院生出張授業プロジェクト（以下，BAPと記す）」という，東京大学の大学院生で構成された学生団体である．BAPという呼称は“Back to Alma mater Project”の略であり，Alma materとはラテン語で“母校”を意味する．この語にも表れているように，BAPはメンバーが各自の出身高校にて自身の進路選択や研究の魅力を講演する「出張授業」を主な活動としている．本稿の著者らのうち，菊池・江崎・中島はBAPの現メンバー，石川・伊與木・正田・音野は元メンバー（東京大学大学院の修了生）であり，それぞれBAP cafeの運営を担ってきた．BAPについてはその発足の経緯を（音野 2013, 2-4）に詳述している他，これまでの活動の詳細を本号以降で別途報告する．

BAPでは，メンバーが出張授業を実施する前に，必ず他のメンバーを高校生に見立てた「練習会」を行う．練習会は，様々な分野の研究の一端を垣間見る絶好の機会でもある．しかし，出張授業においては高校生に研究内容をわかりやすく伝えることが目的となるため，内容の一部を省いたり言い換えたりする必要が生じ，また，練習会では高校生の視点から授業内容を改善するための意見交換がなされるため，その専門的な内容まで踏み込んだ議論まで行うことは難しい．研究内容を余すところなく語り，また互いに心ゆくまで意見を交換する機会も欲しいという声がBAPメンバーの間で聞かれるようになった．この「マニアックな部分を話したい」という動機から，出張授業とは別の機会を設け，大学院生を対象に研究内容を紹介する試みが共著者の石川を中心として始められた．これが本報告の主題である「大学（院）生のための異分野交流アカデミックカフェ『BAP cafe』」である．

2.2 科学コミュニケーションとしてのBAP cafeの位置づけ

上述の通り，BAP cafeは専門性の高い内容を扱う点に特色があると言える．ここで，石田ら（2012, 64-65）および角谷ら（2014, 78）で示されている分類方式に倣ってBAP cafeを次のように位置づける．多くのサイエンスカフェでは，一般市民を対象として想定しており，これは角谷ら（2014, 78）が指

摘する「(狭義の) 科学コミュニケーション」にあたる．これに対して，BAP cafeでは対象として異分野の大学院生・研究者および一般市民の中でも研究内容に強い興味をもつ「高関心層」を想定している．つまり,「異分野コミュニケーション」に重点を置き,且つ「(狭義の) 科学コミュニケーション」の一部も含むと言える．

本報告では“マニアック”という言葉を用いるが，本稿における“マニアック”な話題とは，必ずしも一般市民が広く親しめる話題ではないものの，大学院生・研究者および一部の一般市民を対象とし，またそうした高関心層の興味を満たす効果を想定した，より深い研究内容を含む話題を指している．

3. 実践と成果

3.1 実施形式

BAP cafeでは，現役大学院生あるいは学位取得後数年以内の若手研究者（BAPのメンバーやOB・OGがほとんどであるが，BAP外からスピーカーを招待したこともある）がスピーカーを務める．現在は東京都本郷のカフェ「Lab-cafe」の場所のみを会場として借りており，飲食物の提供は運営陣から行っている．コーヒー・紅茶の他に菓子類を提供しており，菓子類に関しては参加者から差し入れがあることも多い．こうした形式をとることにより，参加費は一人300円に抑えられている．スピーカーの他に数名のBAPメンバーがスタッフとして参加し,受付や飲食物の提供を行う．

会場のLab-cafeは比較的小規模な空間であり,25名程度で満員状態となる．各回の参加者はスタッフを含め20名前後なので，常に適度な人数で開催できているといえよう．スタッフを含め，参加者はスピーカーとともに1つの大きなテーブルを囲んで着席する．スピーカーはプロジェクターを使用してスライドを上映しつつ，トークを進めていく（図1）．

実施時間は19時半から21時半の2時間としており,1時間程度経過した時点で一度休憩をとるが，特にトークの時間と議論の時間を区切ることはしていない．質問やコメントはトークの途中で随時してもらい，議論を挟みながらトークが進行する形式である．また，ファシリテーターは設置していない．スタッフも参加者の一員として議論に参加し，休憩時間の宣言や，時折トークの流れを調整するに留まる．トークの終了後，スピーカーとスタッフは1時間程度会場に残り，希望する参加者との交流とさらなる議論の時間としている．

なお,会場のLab-cafeは貸し切りでの使用ではなく，BAP cafeと無関係な利用者が場にいることも少なくない．そのため,そうした利用者がそのままBAP cafeに耳を傾けるという姿も時に見られる．

図1　第55回BAP cafeの様子
矢印でスピーカーを,矢じりでスタッフを示してある．

3.2 準備と広報

BAP cafeは第58回（2015年7月）までは毎月，第59回（2015年9月）以降は2〜3ヶ月に一度開催している．現在の運営体制では，開催2ヶ月前を目途にスピーカーを決定し，1ヶ月前に広報用の資料を揃えて広報を開始している．広報の手段としては（1）過去の参加者へのメール連絡,（2）大学構内へのポスター掲示,（3）Twitterへの投稿,（4）Facebookページへの投稿を用いている．(1)

は繰り返し参加する“リピーター”への通知が主目的であり，(2) ～ (4) はリピーター・新規参加者の両方へ宣伝できる手段であると考えられる．

3.3 実施内容

2010年8月から2016年10月までの間に，64回のBAP cafeを開催した．これまでのスピーカーの所属分野を図2に示すとともに，各分野について最新の回の内容を表2に示す（64回分の内容は付録を参照）．スピーカーの所属分野は，日本学術振興会の科学研究費助成事業において用いられる分野に合わせて割り当てた．理系分野だけでなく，文系分野も含めて様々なテーマを扱っている．分野ごとの人数には偏りがあり，数物系科学が突出して多く，次に工学が目立つ．これは，BAP cafeを運営する学生団体であるBAPが数物系科学所属の大学院生を中心に設立・運営されてきたことを反映している．また，「大学院生」はBAPのメンバーを，「若手研究者」はBAPのOBなど学位取得後の研究者を示す．

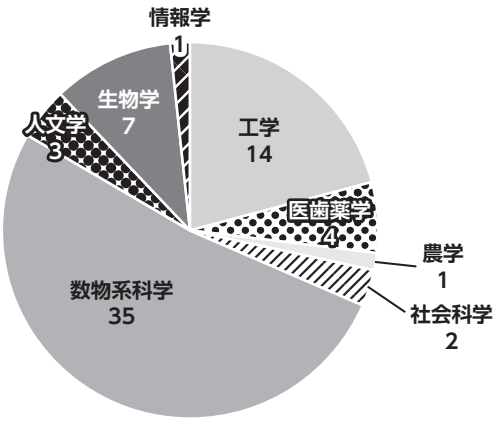

図2　スピーカーの所属分野
数字は各分野の人数を示している

表1 各分野の最新の回の内容

回	開催年/月	タイトル	スピーカー，分野	参加者数
3	2010/10	東南アジア北部熱帯季節林地帯における水・炭素循環 ～タイ・現地観測の現場から～	大学院生，農学	12
12	2011/08	インタラクティブなモノづくり 高速シミュレーションであなたもファッションデザイナー	大学院生，情報学	34
38	2013/10	旅へ出よう！ドイツ教養小説と変わりゆく教養理念	大学院生，人文学	29
41	2014/01	ウイルスが仕掛ける時限爆弾	大学院生，医歯薬学	21
49	2014/10	「無罪推定」と実名報道の是非	若手研究者，社会科学	16
61	2016/02	走れ，日本の鉄道！	大学院生，工学	23
62	2016/06	さいきんのさいきんの話します	大学院生，生物学	23
63	2016/08	“見えた”から“分かった”へ　材料シミュレーション×情報科学	若手研究者，数物系科学	23

3.4 参加者の声

これまでのBAP cafeの参加者は累計1344名にのぼる．BAP cafeでは，参加者の所属，BAP cafeを知った経緯，参加回数，感想等について任意のアンケート調査を行っている．多くの参加者が参加2回目以上のいわゆる“リピーター”であり，初参加の人は各回数名という状況である．任意でのアンケートということもあり，寄せられたコメントは「勉強になった」「楽しかった」など肯定的な意見が大半を占めた．これまでのアンケートで，会の内容について寄せられた感想を抜粋し，表2にまとめた．

表2　BAP cafeに寄せられた感想
（コメント，来場者の所属ともにアンケートに書かれた表現をそのまま掲載）

コメント番号	参加者の所属	参加者からのコメント
1	大学院生	物理は久しくやっていないので話についていくのが大変でしたが，盛り上がっていてよいなと思いました．
2	大学院生	理解はしきれませんでしたが，最先端の物理は知ることができて楽しかったです．
3	大学院生	難しかったけど，おもしろかったです．ありがとうございました．
4	会社員	最新トピックをくつろいだ中で聞けてサイコーでした．ありがとうございました
5	無所属	スピーカーとの距離が近いので，話の内容が身近に感じられてよかったです．
6	会社員	話しやすいカフェなので長く続くとうれしいです．
7	大学院生	質問が沢山出ていて面白かったです
8	無所属	かなり活発でいいね！
9	一般社会人	サイエンス以外の分野（文系も含む）も，色々とカフェスタイルで紹介して欲しいです．それこそアカデミックカフェ．
10	塾講師	皆さんの知的好奇心に驚いた．さすがですね．サイエンスものも聞かせていただきたいと思いました．
11	大学院生	前々から行こう行こうと思っていて遂に参加したのですが，法律のお話でびっくりしました．でもメディアに興味があるので面白かったです．今度は理工系のお話も聞きに行こうと思います！

コメント番号1–4はトーク内容に関して肯定的に言及している．特に1–3からは，理解しきれない部分はありつつも，専門性の高いトークを来場者が楽しめたことが伺える．またコメント番号5–8は4.3に述べる「発言の双方向性」を表しているといえる．

9–11は特に異分野交流という観点から興味深いコメントである．自然科学系の内容を扱った回の参加者からは「人文科学系の話も聞きたい」，逆に人文科学系の回の参加者からは「自然科学系の話も聞きたい」というコメントが寄せられている．これらのコメントは参加者の知的好奇心の旺盛さを反映しており，様々な分野のトークを楽しんでもらえている根拠といえる．また，2.1で述べたとおり，BAP cafeの正式名称は「大学（院）生のための異分野交流アカデミックカフェ『BAP cafe』」である．この「アカデミックカフェ」という言葉には，自然科学系だけではなく人文科学系の研究も紹介していきたいという運営メンバーの思いが込められており，「サイエンスカフェ」という呼称をあえて避けてつけたものである．

4. 特徴の分析と評価

BAP cafeには，サイエンスカフェに類するイベントとしていくつかの特徴がある．以下に，それぞれの特徴とそれについての評価と考察を述べる．

4.1 トークの専門性

一般的にサイエンスカフェは「難しい科学の話を非専門家にわかりやすく伝える」活動（Dallas 2006, 227-229）であり，専門用語や数式を使わず，一つの話題に深入りすることを避ける．これはなるべく多くの参加者に内容を理解してもらうためには必要な工夫であり，これによって幅広い層を対象とすることが可能となり，多くの参加者を集めることができる．

しかし，専門的な話が聞きたいというニーズは少ないながらも確実に存在する．BAP cafeでさ

え,「もっと深いところまで話してほしかった」という声が上がることも珍しくない．この層の参加者はわかりやすさのみを重視した内容では満足感を得にくいと考えられる．BAP cafeでは，対象をあえて狭く設定し，高関心層に絞ることで，専門性の高い内容を扱うことを可能にしている．こうした層の参加者は好奇心が旺盛で，質問が数多く出る（4.3も参照）が，質問と説明が同時進行になったとしても内容を理解できる．また，話題提供の際に「基礎的な解説部分もできるだけ話の中に含める」,「話の途中での質問を推奨する」といった工夫により，トークの内容になじみの薄い参加者でも話に入れるような工夫をしている．

それでも，トークの中でより深入りした話になった際に参加者の一部が話題についていけなくなることもある．しかしながら，表2・コメント番号1–3のように,“難しい話を聞いた”ということ自体が満足感につながっているケースもあるため，分かりやすい説明で理解させること以外にも,“マニアック”な話題を楽しむ，あるいは楽しんでいる雰囲気を味わってもらう等，様々な方法で満足度を高めることが可能だと考える．

また以前に報告されている筑波大学の大学院生らによる企画「プレゼンひろば」(角谷ら 2014, 77–89) と，私達の実施しているBAP cafeは大学院生の異分野交流を目的としている点では共通している．どちらも大学院生が自身の研究内容を紹介するものであるが,「プレゼンひろば」はトークと議論をあわせて30分程度，BAP cafeは2時間程度と，時間が大きく異なる．また前者はプレゼンテーションによって日常的な異分野コミュニケーションを生み出すという趣旨であったが, BAP cafeでは時間をかけて深い議論を交わすことに主眼を置いている点に新規性があるといえる．

4.2 スタッフの役割

BAP cafeのスタッフは全員が大学院生で，自らの研究テーマを持っている．また，様々な研究科の大学院生が関わっているため，スタッフの専門分野は多岐にわたる．この特性によって, BAP cafeではスタッフが様々な立ち位置からイベントに貢献することになる．

まず，スタッフは会が始まったら，一般の参加者と同様にテーブルにつく（図1を参照）．このため，スタッフから，トーク中に質問や意見が出ることも多い．特に，スピーカーと専門分野の近いスタッフが参加している場合は，補足やコメントがスタッフから出る，またはスピーカーがスタッフに話を振る場面がみられる．こうしたことで，場に対話が生まれやすくなる．BAP cafeでの対話については4.3で改めて述べる．

逆に，スピーカーと専門分野がかけ離れていて，トークの内容について専門的な知識をもたないスタッフにも, 参加者としての役割がある.「今話題になっている, それはそもそもどういうもの？」などといった初歩的な質問をスタッフが率先して行い，理解の障壁となる部分について解説を促すことで，できるだけ多くの参加者に会話の内容を楽しんでもらうことを目指している．これはトークの内容について参加者と同等の知識量でありながら，研究者としての目線を持つスタッフであればこそ担える役割である．

また，トーク終了後に設けている交流の時間には，参加者から質問があり，それぞれのスタッフの研究について紹介することも少なくない．こうした会話も含めて, BAP cafeは一度の参加で様々な話題を持ち帰れるイベントだといえる．

4.3 発言の双方向性

サイエンスカフェは双方向性を重視したイベントであるが，スピーカーからの一方的な発信の場となってしまうことがしばしばあり，実際の会の中で双方向性を生みだすのは容易ではない．この点に関して，BAP cafeでは随時質問やコメントを入れてもらうようにしており，トーク中に議論

が起こることが日常茶飯事である．また，近くに座っている参加者同士で議論が盛り上がることもしばしばあり，スピーカーと参加者，また参加者同士の対話が自然に起こる場となっていると考える．

またBAP cafeは，壇上にいる1人のゲストスピーカーと多数の参加者が向き合う講演会形式ではなく，3.1で述べたように，スピーカーと参加者は1つのテーブルにつき，スピーカーとの間で立ち位置に差がない状態になっていることから，同じ目線で話ができる．参加者からも，「スピーカーとの距離が近い」「話しやすい」というコメントが出ている（表2）．前述のとおり，サイエンスカフェは双方向性を重視して行われるイベントであるが，スピーカーからの発信が主となる講演会形式では，スピーカーと参加者の立ち位置に差が生じて，相互に意見を交換することは難しくなる．図1ではスピーカーとスタッフを矢印・矢じりで示したが，示さなければ写真ではどの人がスタッフであるか判別が難しい．このように，BAP cafeではスピーカー・スタッフ含め全員の立ち位置が等しく，また4.2 で述べたようなスタッフによる貢献もあるため，対話が自然に起こると考えられる．また，前述した「プレゼンひろば」（角谷ら 2014，79-81）では，プレゼンターと参加者の両方が立って参加するという工夫の結果，参加者から積極的な質問が出ており，BAP cafeにおいても同じ目線でスタッフと来場者が参加することで対話が生まれやすい状況を作っている．

スピーカーと参加者が同じ目線で対話できていることには会場の雰囲気や参加人数の小規模さが貢献していると考えられるが，他に考えられる要素として，スピーカーが比較的若い（20代～30代）ことが挙げられる．教授や准教授といった大学教員をスピーカーとして迎えるサイエンスカフェと異なり，スピーカーが参加者と同年代，あるいは参加者よりも年下であることから，疑問や意見をぶつけることへの心理的抵抗が少ないのではないかと考察する．参加者からは，「ここまで深く議論を交わし，自分の意見をスピーカーにぶつけられるイベントは珍しい」といった声が聞かれた．

5. 課題の分析

5.1 運営の課題

本章では，BAP cafeのもつ課題について議論する．BAP cafeの課題として，まず運営の効率化が挙げられる．これは継続的な開催のためには必要不可欠であるが，いまだ運営にかかる労力は大きく，開催60回を越えた今なお課題として存在し続けている．この課題への対処として，これまでに以下のような試みをしてきた．

まず，スピーカーに対する制限を緩和した．3.1でも触れたが，BAP cafeでは，スピーカーは主催団体BAPのメンバーあるいはそのOBに限ってきた．BAPのメンバー・OBはBAPの活動である高校への出張授業で「わかりやすく話す」プレゼンテーションを経験済みであることから，トークの質を保つ目的でこうした制限を設けてきた．しかし，制限があることによってスピーカーの数が会の開催数に対して不足しがちであったため，近年この制限を緩和し，BAP外からもスピーカーを招くことにした．その場合，過去にサイエンスカフェなどのアウトリーチ活動の経験がある人に依頼する，などの基準を設けている．この制限の緩和によってスピーカー候補者の幅が広がり，第59回BAP cafeでは，外部の研究者をスピーカーとして招くことができた．

また，開催後の交流の時間についても工夫を行った．3.1では実施は19時半から21時半，後にその場で1時間程度交流の時間を設けてあると述べたが，実はこれは第59回以降の運営方法である．第58回までは，実施時間は20時から22時で，終了後にLab-cafe近辺の飲食店にて交流会を開催していた．実施時間は仕事や研究を終えてから参加しやすいようにと考えて遅くしていたが，その後で場所を変えて交流会となると解散が深夜になる．このため，時間の都合で交流会に参加できない

参加者･スタッフが少なからずいた. そこで, 実施時間と交流会の形態を現在のものに変更した. トークが終了すると，スタッフから終了の挨拶を行い，その後会場に残れる参加者同士で交流の時間を設けている．この変更により，多くのスタッフが交流会の運営に加われるようになり，また交流会まで残る参加者の人数も増加した.

5.2 広報の課題

集客の方法が大きな課題である．BAP cafeは専門性の高い内容を扱うことに主眼を置き，大学院生・研究者および一般市民の中でも高関心層を対象としており，こうした層を積極的に呼び込む必要がある．しかし，現状では参加者のうち大学院生が占める割合は半分以下であり，また3.4で述べたとおり，初めての参加者は毎回数名と，全体の1割程度である．この状況をみると，BAP cafeの対象となる層へのアプローチがまだ不足していると考えられる.

対応策として, 広報の方法を工夫することが挙げられる. 3.2で述べたように, リピーターにはメールで告知を行うほか，不特定多数への広報のために学内でのポスターの掲示・TwitterとFacebookページへの投稿を行っている．2016年は大学院生へのアプローチのため，若年層の目に触れる機会が多いと考えられるTwitterとFacebookページに力を入れ，宣伝中の回で取り上げられる話題に関連するニュース等を紹介する試みを行った.

広報の効果を測定することは容易ではないが，3.4で紹介した参加者へのアンケートには,「どの媒体を見て参加を決めたか」という質問項目を設けており，その回答が参考になる．回答ではTwitter･Facebookページも挙げられるものの，運営側の想像と異なり,「ポスターを見てBAP cafeを知った」という参加者が最も多い．ポスターは東京大学のキャンパス内に掲示してあるため, SNSでつながっていない通りすがりの研究者や学生、近隣住民の目にも触れやすいのかもしれない. 集客については今後も新しい工夫が必要である.

6. おわりに

「マニアの社交場」と題した通り，BAP cafeはサイエンスコミュニケーションの形態としてはかなり専門性の高いものである．専門性の高い内容は敬遠されがちだが，参加者の反応をみてみるとむしろそれ故の満足度の高さも得られており，リピーターの参加者が多数いる．このことから, BAP cafeにおいては, 専門性の高さ, つまり“マニアック”さが効果を生むための重要なファクターとなっていると考えられる．また，学術研究の当事者である大学院生からすると，自身の研究に直接関係のない分野について知る機会はなかなか作れないため，BAP cafeのような場でたっぷりと時間を取ってそれを学ぶことは，視野を広げるための貴重な機会となる．筆者自身も，運営の傍ら毎回のトークを聞いていたおかげで，様々な研究分野について理解が深まってきたことを感じている．BAP cafeはまさに「大学（院）生のための異分野交流アカデミックカフェ」だといえる.

BAP cafeでは，今後も深く濃いトークを提供し，参加者と熱い議論をすることを続けていく．その一方で，新規の参加者を獲得しやすくなるような変化が必要である．広報の充実や，初めてでも参加しやすい雰囲気作りは必須である．今後は，トークの専門性の高さを保つ一方で，間口は広いというイベントのあり方を目指して改善を重ねていきたい.

●文献：

Cormick, C. 2010: “Engaging with Audiences who are Unengaged on Science,” 11th International Conference on Public Communication of Science and Technology（PCST）.

Dallas, D. 2006: "Cafe Scientifique—Dejà Vu," Cell, 126（227-229）.

音野瑛俊 2013:「『設立者に聞きました』Vol.3」『大学生や大学院生がおこなう科学コミュニケーション団体紹介＆活動報告四季報』（12）, 2-4.

石田尚，善甫啓一，上道茜，松原悠，埴生孝慈，尾澤岬，天野千恵，榎田翼，佐藤翔，西浦ミナ子，赤瀬直子，三波千穂美，逸村裕，山田信博 2012:「筑波大学における「院生プレゼンバトル」の事例報告：学園祭における科学コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』（11）, 63-73.

角谷雄哉，佐藤良太，秋山茉莉花，松原悠，藤田佑樹，藤野未来，善甫啓一，田中みさよ，上道茜 2014:「筑波大学における「プレゼンひろば」の事例報告：総合大学における日常的な異分野コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』（16）, 77-89.

渡辺政隆 2014:「サイエンスカフェ事始め」『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』（4）, 5-7.

付録 これまでの実施内容

回	開催年・月	タイトル	スピーカー，分野	参加者数
1	2010年8月	(1)『ガンダム大地に立つ！！』の力学 (2) 高齢化社会に挑むものづくり ※2題実施	大学院生，工学 大学院生，工学	15
2	2010年9月	ストレスと上手につきあうための"セルフケア"のすすめ ～職場のメンタルヘルス研究の現場より～	大学院生，医歯薬学	17
3	2010年10月	東南アジア北部熱帯季節林地帯における水・炭素循環 ～タイ・現地観測の現場から～	大学院生，農学	12
4	2010年11月	将来宇宙輸送システムの誘導制御 ～統計数理学的アプローチの提案～	大学院生，工学	20
5	2010年12月	セキセイインコにおける社会的認知	大学院生，社会科学	26
6	2011年1月	まちづくり会議の分析を通して ～会話分析アプローチに託された未来～	大学院生，工学	12
7	2011年2月	（自称）正統派初期宇宙論	大学院生，数物系科学	20
8	2011年4月	渦巻・螺旋状のかたちとその現代的展開 ～宗教学の視点から～	大学院生，人文学	18
9	2011年5月	微生物の世界にようこそ！	大学院生，生物学	23
10	2011年6月	「人工知能」と呼ばれる学問分野について ～「知能」とは何かについて探る～	大学院生，工学	25
11	2011年7月	現代アート裁判	若手研究者，人文学	20
12	2011年8月	インタラクティブなモノづくり 高速シミュレーションであなたもファッションデザイナー	大学院生，情報学	34
13	2011年9月	みえない（　）をみる. ～10^23個が生む個性を緻密に紐解く計算物性物理学～	大学院生，数物系科学	16
14	2011年10月	"小さな孔" から世界は広がる	大学院生，工学	23
15	2011年11月	磁場とプラズマのマリアージュ ～母なる太陽の素顔～	若手研究者，数物系科学	26
16	2011年12月	夢の光が叶えるモノ ～放射光施設より愛を込めて～	若手研究者，数物系科学	18
17	2012年1月	宇宙に浮かぶ円盤 ～磁場とプラズマと時々宇宙塵～	大学院生，数物系科学	23

回	開催年・月	タイトル	スピーカー，分野	参加者数
18	2012年2月	チラリズムの火星学　見えそで見えないあそこの話	大学院生，数物系科学	24
19	2012年3月	「いのち」に寄り添うナースの仕事 ～臨床現場とメンタルヘルスの研究者の立場から～	大学院生，医歯薬学	30
20	2012年4月	化石から進化史を"発掘"する	若手研究者，数物系科学	25
21	2012年5月	炭素をまわす　化石エネルギーと二酸化炭素の地下貯留	大学院生，工学	21
22	2012年6月	重力レンズで宇宙の暗黒を見る	若手研究者，数物系科学	22
23	2012年7月	世界はまがる 有機エレクトロニクスで作る新しいデバイスの世界	大学院生，工学	18
24	2012年8月	南部理論の，その「先」へ 紙と鉛筆で半世紀の未解決問題を解き明かす	大学院生，数物系科学	25
25	2012年9月	数式に泣かされた夜のこと	若手研究者，数物系科学	30
26	2012年10月	太陽，活動やめるってよ？ ～太陽活動周期の問題を解決するための真面目な話～	大学院生，数物系科学	22
27	2012年11月	人と世界の境界をはかる	若手研究者，工学	14
28	2012年12月	不思議な光「レーザー」を使って目に見えない原子や分子の 世界をのぞいてみよう ～大切なものは目に見えない～	大学院生，数物系科学	19
29	2013年1月	イオンと電子が見えるとき	若手研究者，数物系科学	21
30	2013年2月	わからぬといへばわからぬ　その陽子袖振れあえば 顔向けるやも	若手研究者，数物系科学	18
31	2013年3月	深海底の堆積物から探る過去の気候変動	大学院生，数物系科学	11
32	2013年4月	宇宙の声が聞きたくて　―重力波観測とその未来	大学院生，数物系科学	31
33	2013年5月	そうだ 宇宙，行こう. 紙と鉛筆だけで自然界を感じるなんてジョーダンでは ありません	若手研究者，数物系科学	41
34	2013年6月	「隠れた」光を探し出せ！	大学院生，数物系科学	23
35	2013年7月	Internet Addiction ～日本人集団における３つの インターネット依存症尺度の信頼性と妥当性～	若手研究者，医歯薬学	24
36	2013年8月	人間の意思，感情を科学する	大学院生，工学	22
37	2013年9月	ヒッグス粒子の発見と新しい真空の物理	若手研究者，数物系科学	34
38	2013年10月	旅へ出よう！ドイツ教養小説と 変わりゆく教養理念	大学院生，人文学	29
39	2013年11月	最近(さいきん)の細菌(さいきん)の話します	大学院生，数物系科学	22
40	2013年12月	精度よく数を数える～加速器を用いた精密測定実験～	大学院生，数物系科学	24
41	2014年1月	ウイルスが仕掛ける時限爆弾	大学院生，医歯薬学	21
42	2014年2月	なのなあな　～"小さな孔" から世界は広がるEncore～	大学院生，工学	18
43	2014年3月	ミクロな世界の探索　～中性子で見える世界～	大学院生，数物系科学	18
44	2014年4月	Gravity in the Universe 加速膨張宇宙の謎に迫る	大学院生，数物系科学	30
45	2014年6月	宇宙の果ての銀河たち	大学院生，数物系科学	19
46	2014年7月	人工衛星による温室効果ガス観測	大学院生，数物系科学	14
47	2014年8月	追跡せよ！うごめく細胞！	大学院生，生物学	18
48	2014年9月	極微の世界の「周期表」 ～素粒子物理学はどのように発展してきたか～	大学院生，数物系科学	19

回	開催年・月	タイトル	スピーカー，分野	参加者数
49	2014年10月	「無罪推定」と実名報道の是非	若手研究者，社会科学	16
50	2014年11月	膜を巡るめくるめく話～細胞とオルガネラと小胞輸送と～	若手研究者，生物学	21
51	2014年12月	せかいはまがる ～フレキシブルエレクトロニクスで拓く新しい医療の世界～	大学院生，工学	9
52	2015年1月	炭素をまわす エネルギー，化石燃料とCO2地中貯留のはなし	大学院生，工学	20
53	2015年2月	宇宙の円盤を，かき混ぜる話.	若手研究者，数物系科学	22
54	2015年3月	“モノが見える”とはどういうこと? -電子顕微鏡と最先端加速器の融合-	大学院生，数物系科学	15
55	2015年4月	Dig into the Universe!	若手研究者，数物系科学	17
56	2015年5月	（1）聴きとろう！～宇宙を漂う残響を～ （2）(もっと)さいきんのさいきんのはなしします ※2題実施	大学院生，数物系科学 大学院生，生物学	18
57	2015年6月	見えない光で宇宙を観る-赤外線天文学-	若手研究者，数物系科学	16
58	2015年7月	正確な時を刻む～1秒を決める時計の話～	大学院生，数物系科学	17
59	2015年9月	これからうんちの話をしよう	若手研究者，生物学	18
60	2015年12月	宇宙ものさし～夜空の星までの“キョリ”を測る～	大学院生，数物系科学	22
61	2016年2月	走れ，日本の鉄道！	大学院生，工学	23
62	2016年6月	さいきんのさいきんの話します	大学院生，生物学	23
63	2016年8月	“見えた”から“分かった”へ 材料シミュレーション×情報科学	若手研究者，数物系科学	23
64	2016年9月	みんな気になった，あの話 ※オムニバス形式で4題実施	大学院生・若手研究者 生物学・数物系科学	32